

# 道東沿岸の貝類相について

和歌山 満

## 1. はじめに

1986年8月1日から1週間、浦幌町厚内公民館にて「道東貝類百展」と銘打って、100種類の標本を展示する機会を得た。漁場として、海に深く関わっておられる住民の方々に、身近な貝類を改めて見直していただけた事は筆者にとっても喜びであった。

本文では、出品した100種類を記載し、あわせ

て道東近海を生息域とする貝類相の特徴を簡単に述べる事にする。

## 2. 分類学上の位置

二枚貝や巻き貝の名で親しまれている貝類は、軟体動物門に所属し、7綱に大別されているが、それらの系統を示すとFig.1のようになる。

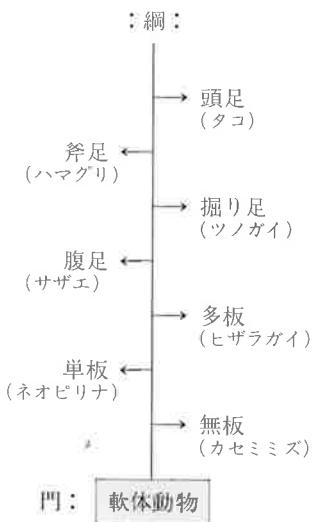


Fig. 1 貝類の分類

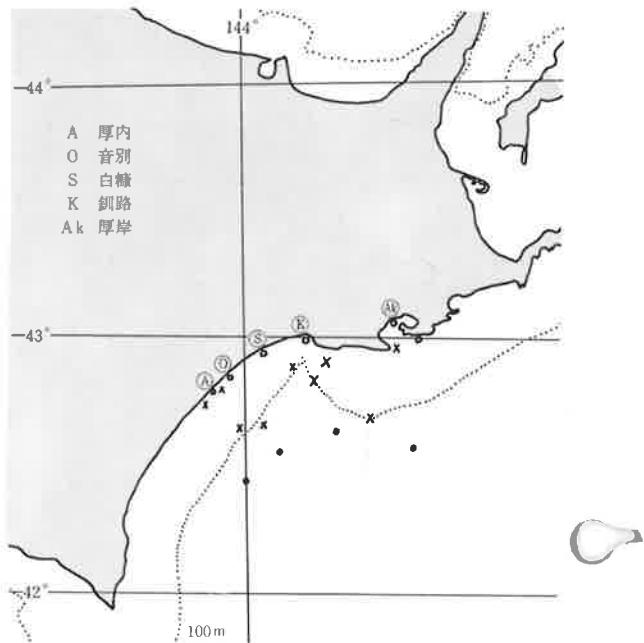


Fig. 2 道東海域と採集地点

## 目 次

道東沿岸の貝類相について	和歌山 満	2
浦幌町の近世史料（覚書）	後藤秀彦	7

表紙写真説明：第3回浦幌村甜菜品評会優勝記念

本町のビート作付けは主に上浦幌方面から始められ、喫茶牛には「甜菜改良組合」も結成された。写真は昭和8年4月12日のもの（後藤秀彦）。

多板・腹足・斧足の3綱がこの報文対象である。

ものである。

### 3. 主な採集地点

Fig. 2は、標本を採集した概略地点を表している。厚内から厚岸に至る沿岸で、潮間帯から水深100m前後の限られた海域であることを断つておく。潮間帯に生息する種類については、直接採集したが、他は主に魚網等に掛かった個体を収集した

### 4. 道東に生息する貝類百種

分類に従って種名とその産地を明らかにするとTable 1のようになる。ただし学名は省略して和名のみ列記し、採集深度分布は、Fig. 2に対応させた。

## 軟体動物

(凡例: \*陸産 \*水産)

綱	目	科名	種名	採集地		
				○潮間帶	×100m以浅	●100m以深
多板	新多板	ウスヒザラガイ	エゾヤスリヒザラガイ	A k		
		オオバンヒザラガイ	オオバンヒザラガイ	A k		
原始腹足		スカシガイ	コウダカスカシガイ	A		
			ユキノカサガイ	A		
			ベッコウシロガイ	A		
			エゾノハナガイ	A		
		シロガサガイ	クラギシロガイ	A		
		ニシキウズガイ	エゾシタダメ	A		
腹足	中腹足		タマキビ	A		
		タマキビガイ	クロタマキビ	A		
			エゾタマキビ	A k		
		ウミニナ	ホソウミニナ	A k		
		ヒゲマキナワボラ	カゴメナワボラ		A	
			ヒゲマキナワボラ		A	
		キリガイダマシ	エゾキリガイダマシ		S	
		カリバガサガイ	エゾフネガイ		A	
		ゴマガイ	*エゾゴマガイ	A		
		ベッコウタマガイ	ウスカワハナツトガイ	A k		
			エゾタマガイ		S	
			ヒラセタマガイ	A		
異腹足		タマガイ	チシマタマガイ		S	
			キタタマガイ		A	
			タマツメタガイ		K	
			クリガイ		S	
		フジツガイ	アヤボラ			A
新腹足	アクキガイ	イトカケガイ	エゾイトカケガイ			K
			ツノオリイレガイ		A	
			アラスカツノオリイレガイ		A	
			ベーリングツノオリイレガイ			K

Table 1

道東に生息する貝類百種

(1)

綱	目	科名	種名	採集地		
				○潮間帯	×100m以浅	●100m以深
腹足	新腹足	アクキガイ	エゾツノオリイレガイ			S
			オオウヨウラクガイ	A		
			チヂミボラ	Ak		
			オオチヂミボラ	A		
			オリイレロウバイ	アオモリムシロガイ	Ak	
		エゾバイ	フトコロガイ	コウダカマツムシガイ	A	
			シワミドリホソバイ		A	
			リクゼンシワバイ		A	
			ツムバイ		A	
			マキミヅツムバイ		K	
			オオエゾシワバイ		A	
			ヒモカケヤゲンバイ		K	
			ネジヌキバイ		A	
			ナガバイ		A	
			ヒメエゾボラ	Ak		
			フジイロボラ		A	
			エゾボラ		A	
			エゾバイ		A	
			クリイロエゾボラ		A	
			カラフトエゾボラ		K	
斧足	有肺	ヒタチオビガイ	エゾボラモドキ		S	
			アツエゾボラ		A	
			クビレバイ		A	
			コエゾバイ		A	
			チシマバイ	A		
			オオカラフトバイ		K	
			リクゼンボラ		K	
			ミギマキタゴトナシボラ		K	
			ヒタチオビガイ	フデヒタチオビガイ		S
			エゾイグチガイ		A	
斧足	原鰓	オカモノアラガイ	ヒダリマキイグチ		K	
			ヤゲンイグチガイ		K	
		オナジマイマイ	オクダフタマンジ		A	
		オカモノアラガイ	*オカモノアラガイA			
斧足	糸鰓	オナジマイマイ	*サッポロマイマイA			
		シワロウバイ	フリソテガイ		A	
		フネガイ	コベルトフネガイ	A		
		イガイ	ムラサキイガイ	A		
		イガイ	エゾヒバリガイ	A		
		イガイ	ハブタエタマエガイ		K	

Table 1 道東に生息する貝類百種 (2)

綱	目	科名	種名	採集地		
				○潮間帶	×100m以浅	●100m以深
糸鰓	イタヤガイ	ホタテガイ		Ak		
		エゾキンチャクガイ	A			
		イラクサニシキガイ		K		
		アラスカニシキガイ		K		
		ナミマガシワガイ	ナミマガシワガイモドキ		S	
		イタボガイ	マガキ	Ak		
斧足	シコロザイ	エゾシラオガイ	アラスカシラオガイ		K	
		シジミガイ	*ヤマトシジミガイO			
		トマヤガイ	カガミマルフミガイ		A	
		ザルガイ	ホソスジイシカゲガイ		Ak	
		エゾハマグリ		S		
		エゾヌノメガイ		Ak		
真弁鰓	バカラガイ	ヌノメアサリ	A			
		アサリ	Ak			
		ウバガイ		A		
		ナガウバガイ		S		
		エゾバカラガイ		S		
		アシガイ	エゾイソシジミガイ		O	
ニッコウガイ	ニッコウガイ	サラガイ		A		
		アラスジサラガイ		S		
		セイタカシラトリガイ		S		
		シラトリガイ		S		
		ヒメシラトリガイ		S		
		エゾマテガイ		S		
マテガイ	マテガイ	オオミヅガイ		A		
		オオノガイ	*オオノガイO			
		サザナミガイ	フトオビクイガイ	A		
		ニオガイモドキ		A		
		カモメガイモドキ		A		
		ネリガイ	ヒラネリガイ		O	

Table 1 道東に生息する貝類百種 (3)

## 5. 道東の貝類相について

道東海域をくまなく網羅している訳ではないが、ごく普通に観察、または採集可能な100種類をもとに、貝殻の形象に絞って特徴を書くことにする。

(1)灰白色の薄い殻を持つ種類が多く、硬くてもろい個体が目立つ。アラスカニシキガイ、フリソデガイ、クリガイ、フジタバイ等は前者、エゾヒバリガイ、ニオガイモドキ、クビレバイ、オオカラフトバイ等は後者の例にあたる。特に巻き貝の

外唇は壊れやすく、完全な標本を手にするのが難しい。

色彩面では、白質の地に乾燥すると剝離しやすい膠質の茶、黄褐色、暗灰色からなる薄い膜を呈する。つまりイラクサニシキガイ、エゾキンチャクガイ等数種を除いて見栄えはしない。

以上の傾向は、北半球の北方種に特有という訳ではなく、南極海の貝類にも共通した特徴である。貝殻形成時の反応に、海水温、濃度、透明度が関

与しているのだろうか。餌も考えられて、まことに興味深い。

(2)北方寒流域をすみかとする種で占められ、暖海種は全く見られない。この特色は、北方を意味する和名に反映している。アオモリ、エゾ、カラフト、チシマ、アラスカ、ベーリング、キタ、ユキの接頭語が付けられ、100種中35%に命名されていた。

渡部(1978)は、日本の貝類で分布を考察しているが、暖流と寒流の影響を重要視し、調査地点の地理上の緯度と二枚貝の分布する中心緯度の中央値との相関図から、噴火湾より北では著しく寒流系の貝類が多いと指摘する。

寒流系の代表に、ヒゲマキナワボラ、エゾボラ、ヒメエゾボラ、エゾバイ等をあげているが、これらは、いずれも道東に普通で、生息数の多い種類である。他方暖流系の代表は、イモガイとタカラガイ類だが、道東はもとより北海道では全く見つかっていない事実からも逆説的に北方を裏付けていると言える。

(3)優勢な貝類は、腹足綱、新腹足目のエゾバイ科に属する種類で、数密度も高く、かつ大型種を含んでいる。

全体の63%を占めた腹足綱は、目のレベルで57%と半数を超す。エゾバイ科は21種を保有し、45科中最大であった。

エゾボラ、エゾボラモドキ、ヒメエゾボラ、クビレバイは、経済的価値の高い種で、一般にマツブ、ツブ、トウダイツブと呼ばれ、大量に水揚げされている現状からも繁栄を認めてよいだろう。

エゾボラ、ミギマキタテゴトナシボラ、クリイロエゾボラ、エゾボラモドキ等は、殻高15cm以上の見事な個体に成長するものがある。

(4)エゾバイ科には、個体変異と思わしい種類があって、1個体で種名を同定するには困難な例が多い。

張(1974)は、北海の貝類特性として、種類は乏しいが、亜種が多いと述べている。すなわち種間に、連続的かつ中間的特徴を受け継ぐ個体が出現していると考えてよい。

筆者は、比較的顕著な4種類を例に、外部形態の変化を強調してみたい。

### ① コエゾバイの変化型

この系統種は、コエゾバイを模式に、オホー

ツクバイ、チシマバイ、ミクリガイ、マルエゾバイに近似した殻形や紋様をとどめる例である。なかでも斜に走る縦肋が特色のオホーツクバイ型や螺肋上に断続黒点模様を印したチシマバイを模した個体は確認しやすい。

### ② エゾボラモドキの変化型

大型になるこの種には、ウネエゾボラのように螺層にはっきりした螺肋がつくもの、殻全体が細くなるもの、外唇が外に反ったり、体層がよく膨らむタイプ等、変化に富んでいる。

### ③ ヒメエゾボラの変化型

縦肋や肩の突起が強いタイプと、それらを欠いて螺層が丸みを帯びる個体群に大別できる。また肩角の全くないものは小さい貝に多く、殻口内壁に歯状裏を刻む傾向がある。

### ④ クビレバイの変化型

トウダイツブの俗称を持つこの種は、螺肋数の違いや肋の強弱差に、体層や欠体層の膨らみが複合、オオカラフトバイとシライトイマキバイの中間を思わせる個体を見つけることが可能である。

成貝の外唇は括がり、差異はないが、殻口の色は、白と橙の二型にはっきり分かれ。

### ⑤ その他

緯度的水平分布がもたらす連続的形態変化の例に、ニオガイ科のニオガイがあげられる。インド洋から日本まで、北上するにつれて大型のオニニオガイが矮小化し、ニオガイの形で適応したと考えられている。厚内では、3cm程度の殻長に止っている。

同科のカモメガイモドキを寒流域に分布しない種(渡部、1965)とするが、筆者は、厚内にて、緑泥質砂岩塊中に穿孔した個体を採取している。殻長の小型化が言えるかどうか、精査が必要である。

水深100mくらいで、密度の高いアヤボラ——ケツブと称されているが——は、南下するにつれて深度を増し、四国付近で、700~1,000mの深海に同属のカブトアヤボラとして生きる例があって、その関連も興味深い。

エゾバイ科で、ユウビエゾボラの北方型と記載されている三陸沖産のマドカエゾボラ(桜井、1969)は、アツエゾボラに近似していると考えられる。

## 6. おわりに

道東近海が北太平洋の貝類相を反映していることに異論はないだろう。緯度のスケールよりも海流の影響が大であるらしいことは、化石の証拠からもわかる。例えば、十勝太の海食崖露頭の貝化石中には、寒流系現存種と暖流系のウネナシトマヤガイヤサルボウが共存していた（十勝の自然史研究会編、1983）。一方、大陸沿岸性貝類のアサリやヒメシラトリ等は内海や湾に広く分布しており、緯度や寒暖流のみで説明しきれない。寒流の貝を知るには、暖流との関連から、生態研究も含めた同属亜種間の詳細な対比が大切と思われる。

近年、水産資源として重要なクビレバイ、アヤボラ、エゾボラは、水揚げ量が急増している一方で、個体数の減少と小型化が話題になりつつ

あると聞いている。また大陸棚最深底で、真っ白い巻き貝が捕獲されるらしい。これからも一層関心を持ち続けるつもりである。

（千葉県松戸市立六実中学校教諭）

## 引用文献

- 渡部忠重・伊藤潔（1965）貝類図鑑vol.-1  
———・小菅貞男（1967）貝、3  
桜井欽一・千葉蘭児（1969）VENUS vol.-28  
No.2 P99~100  
K.M.CHANG(1974)Bull,chin.Malacol.soc,1 P21~30  
渡部忠重（1978）自然科学と博物館 vol-45 No.2  
P58~63  
十勝の自然史研究会（1983）十勝の自然を歩く、  
3 P153~154

# 浦幌町の近世史料（覚書）

後藤秀彦

これまで、浦幌町の歴史を語るとき、明治以降のいわゆる「開拓時代」を起点として、その後の歴史を語ることが多かった。浦幌町の比較的まとまった『浦幌村五十年沿革史』（間宮、1947）や『浦幌町史』（山口、1971）を見ても、その発刊意図にもよって、開拓期以降の記述に力点が置かれ、それ以前の事象についてはわずかに記載されているにすぎないのが現実である。

もとより、人間の歴史というものは、人間がその土地に居住を始めたときから現在までを大局的に見る必要があり、歴史学もすべての人間の歩みをその研究対象とすべきものである。かかる観点からすると開拓期（この名称も適切ではないが）以前の歴史を捨象するという姿勢は正さなければならない。その土地に人が住み始めたという事象を的確に把握して、その歩みを真摯に見つめなおす必要があろう。

浦幌町においては、縄文早期（現時点においては旧石器時代の遺跡は発見されていない）から人が居住を始めており、そこから現在に至るまで

の悠久の歴史を研究の対象とすべきであり、かかる観点なくしては歴史学の成立はありえない。

これまで、浦幌町の歴史についての研究は、主に先史時代の遺跡・遺物やチャシ跡について考古学的な側面からなされ、道内外の数多くの研究者によって多くの業績を残してきたことは大きな成果である。これは、本町が北海道の南東岸に位置し、十勝川という大河を擁しており、各時代の遺跡や豊富な出土遺物の様相にも起因している。

また、開拓期の街並みの形成状況（君、1958）や浦幌炭礦の状況（寺島、1974）についても研究者の触れているところである。

この小文においては、中～近世の浦幌町の様相を述べることがその目的であるが、現実的には中世に属する史料は皆無であり、近世についても17世紀中葉以降のものが大部分である。そうした意味においては17世紀中葉から19世紀中葉までのおよそ200年間にわたる記述をここですることとなるが、この200年余の期間にしても史料数は断片的であり、旅行記や日誌類などが中心的な史料と